説教要旨『イエスを食べる！？』

ヨハネによる福音書　６章４８～５９節

イエスはパンを食べ、ぶどう酒を飲むことを通して、十字架に示された神の愛を伝えようとしました。それは今も、「聖餐式」という形で教会に引き継がれています。しかしその儀式は、ハタから見れば、大変奇妙に映ることでしょう。パンを食べ、ぶどう酒を飲む行為は、十字架で割かれたイエスの体を食べ、そこで流された血を飲むことを意味しているからです。当時のユダヤ人達も、「実にひどい話だ」（60 節）と感じていたようです。例えば、「食べる」という方法でなくても、イエスの傷跡に触れるようにパンやぶどう酒に触れることで、イエスの十字架の愛を思い出させることも出来たはずです。

「あなたが苦しむことなく成功したとしたら、誰かがあなたの代わりに苦しんでくれたのです」（星野富弘）。私たちが日々生きている舞台裏では、たくさん人の我慢や忍耐や犠牲があったのではないか、そういうことを改めて思わされます。十字架で割かれたイエスの体（パン）と流された血（ぶどう酒）を食することは、私たちが日常的に他者の命を蝕みながら生きている、それだけ残酷で重い罪を背負っている、そのことをも思い起こさせてくれるように感じます。それは、パンやぶどう酒に触れるという象徴行為だけでは感じ得ない事柄です。

ただ、イエスは何も、パンとぶどう酒によって、私たちを断罪したかった訳ではありません。イエスは一つのパンを割き、一つの杯を回して弟子たちに配餐しました。現在多くの教会では、便宜上、最初からサイコロ状に切り分けられたパンと、小さな杯に分けられたぶどう酒（ジュース）を配餐していますが、本来は、一つのパン、一つの杯から分けられたものであることを忘れないでいたいと思います。そのことで私達は、お互いがイエスの体と血の犠牲に責任を負っている同士であることを感じられると同時に、それ故にこそ、私達は主イエスにあって互いに愛し合い、ゆるしあい、つながり合える存在であることを思い起こすことができるからです。

「むかし罪人だったというあなた。今も相変わらずつみびとなんですね。毎日、毎日、目に見えない宝を天に積み上げている、素晴らしい積み人です」（星野富弘）。イエスの十字架を前にした罪の自覚、その積み重ねこそが私達一人ひとりの心のなかに、他者を理解し、受け入れるための隙間を作っていきます。イエスがお与えになるのは、空腹を一時しのぐための朽ちるパンではありません。生涯にわたって、いや、死後に至るまで、私の命とあの人の命をつなげる「世を生かすための」（51 節）パン、主イエスご自身の犠牲の体なのです。

（文責：望月達朗牧師）